コルネリウスの思想とフランクフルト学派への影響

青柳雅文

はじめに

フランクフルト学派（批判理論）の代表的人物であるM・ホルクハイマーやTh・W・アドルノの思想をとりあげる際に、若きかれらの指導教官であったH・コルネリウスの思想からの影響について論じられることは少ない。かれらとコルネリウスの間には断絶があると考えられているからである。それではコルネリウスの思想というのは、論じるに値しないと言えば、そうではない。ホルクハイマーやアドルノの思考には、コルネリウスから受け継いだ発想や方法が含まれている。そこで本稿は、かれの思想とフランクフルト学派への影響について考察したい。これによって、コルネリウスの思想史的位置が定められ、フランクフルト学派に及ぼした影響も少なからずある点が明らかにされるだろう。

以下では、まずコルネリウスの思想について概観する。かれの思想においては、独断論を退けつつ、学問としての哲学の構築がめざされている。その際コルネリウスはI・カントの哲学やゲシュタルト理論から影響を受け、それを批判的に受容しながら、自らの哲学的立場を形成したのである。次にこうしたコルネリウスの指導のもとで、若きホルクハイマーとアドルノがどのような思想を形成したのか、後年の立場も念頭におきつつ考察する。

一　コルネリウスの思想

コルネリウスは、物理学、化学、数学から哲学へと研究の関心を移しながら、とりわけ認識論的な問題について探究を深めていた。またかれは実践的・政治的な問題にも議論を展開させ、さらには芸術学や教育学にも視座を広げた。このかぎりでもかれは非常に多方面にわたる活躍を見せた人物であった。本稿ではとくにかれの哲学、認識論的問題に焦点をあてて考察したい。

1　独断論の拒否

コルネリウスは、哲学を学問論的関心から理解している。かれにおいて「哲学は、あらゆる学問探究に共通の、明瞭性Klarheit一般に向けた努力というよりも、究極的な明瞭性への努力、あらゆる現出の最終的な、究極的な、最高の説明Erklärungに向けた努力である」（EidPh.7）。この意味で哲学は、諸学問の根本にある学問である。諸々の学問は哲学を基礎にして、「概念的に秩序づけられた知識を獲得しようとする」（TrS.3）、つまり経験的事実に拠ることなく純粋に知識の体系を形成しようとする。コルネリウスにおいて哲学とは、諸学問を統一的に秩序づける根本的な学問であり、普遍的な体系を形成する学問なのである。

ところが哲学は、そのような明瞭性をかならずしも獲得できていない。

コルネリウスは、「あらゆる不明瞭な要素を学問的思考から遮断すること」（EidPh.VI）をめざした。この不明瞭さを生み出す立場として、かれがとくに指摘したのは独断論である。ここでの独断論とは、「経験において示されない何らかの諸前提を盲目的に想定する」（EidPh.38）立場だとされる。そして独断論が用いる、およそ経験とは無縁に定立された諸概念、「われわれの知覚から独立した現存在の概念」（EidPh.48）を、コルネリウスは「自然主義的諸概念」（EidPh.49, vgl.K.2）と名づけた。これらの概念は、具体的に言えば、「それ自体で独立して――われわれの知覚から独立して――現存する物」（K.2）、「原因」（ibid.）、そして「自我」（EidPh.49）ないしは「精神的人格性」（K.2）である。この自然主義的諸概念と、これらの概念を無批判に定立する独断論を、コルネリウスは一貫して拒否した。これによってはじめて、根本的学問としての哲学が打ち立てられるのである。

ところで、学問に明瞭性をもとめ、体系を志向するコルネリウスの動機は、かれがもともと物理学、化学、数学を学んでいたことに由来する。[1] とりわけカントの『純粋理性批判』との出会いをきっかけにして、哲学研究における学問的明瞭性への追究がおこなわれた。かれの立場は、カント哲学からの影響が色濃くあらわれている。たとえば前述の自然主義的諸概念は、カントにおける超越論的仮象[2]を念頭において構想されたと考えられる。コルネリウスがカント哲学を評して言うには、「認識論の進歩にたいするカントの研究の本質的な功績は〔……〕一方であらゆる懐疑的な反論にたいして学問的で普遍妥当的な認識の可能性を確定し、他方で伝統的な独断的形而上学を克服するための道を示したことにある」（K.5）。コルネリウスにおける根本的学問としての哲学は、カントにおける「形而上学」（KdrV.B869）[3]に相応する。だが形而上学への志向はつねに独断論に陥る危うさを含む。というのも、形而上学を貫く原理が実体化され、個々の表象にたいして無批判に適用されうるからである。カントは、因果性概念の独断的定立にたいするD・ヒュームの批判をつうじて、「独断のまどろみ」（Ak.IV.260）から覚まされた。コルネリウスによれば、「独断のまどろみは、本質的に言えば、前学問的思考から受けとられた」自然主義的諸概念が、「それらを手助けにして世界全体の統一的説明を、つまり『形而上学』を基礎づけるために無批判に適用されたことにおいてある」（K.2）。[4] カントは独断論に陥ることを回避しようと、経験のはたらきに注目した。かれは「われわれのあらゆる認識は経験をもって始まる」（KdrV.B1）と述べて、経験との関係において理性能力の範囲と限界を明らかにしようとした。だがその一方で、カントはかならずしもすべての認識を経験に還元しようとするのではなかった。かれは「われわれのあらゆる認識が経験をもって始まるとはいえ、それだからといってわれわれの認識がすべて経験から生じるのではない」（KdrV.B1）と述べて、「経験から独立し、また感官のあらゆる印象からさえも独立しているような認識」（KdrV.B2）についても問うた。コルネリウスにおいてもまた、「学問的説明は、経験の境界内にある」（EidPh.37-38）のであって、「純粋に経験に適った説明、あるいは経験的な説明」（EidPh.38）として、独断的説明と対置された。独断的説明を退けるだけでなく、さらに経験に立ち戻って説明することで、学問における明瞭性、とりわけ哲学における究極的明瞭性は獲得されるのである。かれは独断論を退けるために、経験の役割を積極的に認めたが、哲学の純粋性・普遍性への確信ももっていた。このかぎりでも、コルネリウスの思想はカント哲学に倣っていたと言えよう。

2　フッサールからの批判

コルネリウスにおいて、学問としての哲学は、独断論の拒否という消

極的方法で構築されるだけではなく、経験に立ち戻って積極的に構築されようとした。その際かれが根本的な学問として当初構想していたのが「経験の学」（PE.3）としての心理学[5]であった。かれは心的事実、および意識におけるその体験を出発点として、その上に諸学問を構築しようとしたのである。

ところが、こうしたコルネリウスの構想にたいして批判が生じた。その中でも代表的なのはE・フッサールの批判である。かれの著書『論理学研究』第二巻において、コルネリウスの思想は「現代のヒューム主義」（Hua.XIX/1.211）と呼ばれた。つまりコルネリウスの思想は、認識論を心理学主義的に理解する立場として、その最たるものとして位置づけられた。フッサールによれば、「コルネリウスの著書は、認識の志向的内容〔……〕に属しているものを、認識の志向的対象に属しているものと混同し、さらにこれら両者を、認識体験のたんなる心理学的構成物に〔……〕密接あるいは疎遠に属しているものと混同している。」（ibid.）フッサールは、志向的内容と志向的対象をはっきりと区別すべきだと考えた。その上で心理学主義を乗り越え、諸学問を基礎づける学問として、かれは現象学を打ち立てようとしたのである。

こうしたフッサールの批判にたいして、コルネリウスは「『心理学主義』を認識論的研究から除外することは、もちろん正しい」（TrS.49）と述べて、フッサールの立場に賛同しつつ、自分の心理学がフッサールの批判している心理学主義にあたらないと考えている。そしてかれは「心理学的分析と因果説明は、相関概念ではない」（ibid.）と述べて、自分の心理学を因果説明から区別している。かれの言う心理学的分析は、J・ロックやヒュームに代表される経験論が、「観念法則的連関を確定する目的」（ibid.）で探究した立場と同じであり、かれはこれを「現象学的分析」（ibid.）と名づけてもよいと考えた。こうした心理学的研究は「もっとも普遍的な超越論的合法則性を示そうとすることであり、これが超越論的現象学として特徴づけられる。」（ibid.）コルネリウスは、自分の見解がフッサールの現象学に近いものだと考えたのである。そして「心理学」という用語を、誤解を招くものとして事実上とりさげた。心理学に代わって、コルネリウスはフッサールと同じ「現象学」という用語を使い、超越論的現象学にもとづいた学問体系を打ち立てようとした。このことは、コルネリウスがフッサールに歩みよっているようにも見える。意識と対象との直接的関係に着目し、基礎的学問をもとめている点では、ふたりは最初から同じであった。それが心理学なのか、現象学なのかで異なっていたのである。

しかしふたりの見解が異なるのは、たんに用語法上の問題だけではない。両者はより本質的な部分で異なっている。フッサールの場合、すべてを要素に区分し、それらを基本単位にしてふたたび組み立てなおす、という方法をとっている。その一方でコルネリウスの場合は、すべてが全体としてまず与えられ、そのうえで、中に含まれた構成部分を分類してとりあげる、という方法である。たとえばフッサールは、内在において超越をめざすという立場から、内在的なものと超越的なものとの連関を強調しているが、その一方で両者を区別もしている。これにたいしてコルネリウスは、内在的なものと超越的なものもともに意識内在において与えられ、複合的に認識できると考えた。このように、ふたりはもとめているものが同じであるにしても、そもそも視点や方法がまったく異なっていたのである。

3　カント哲学の経験主義的・全体論的修正

一方で独断論を拒否しながら、経験にもとづいた統一的で体系的な哲学をめざし、他方で経験一辺倒にならずに、純粋で普遍的な哲学をもと

めるというのが、コルネリウスの哲学的立場である。この立場はカントからの影響が大きい。カント哲学は、根本的な学問としての哲学への志向と、経験の重視との均衡の上に成り立っている。これによって独断論と懐疑論をともに乗り越えることができた。だが換言すれば、この均衡が崩れれば、独断論あるいは懐疑論へと陥りかねない。しかもカント哲学では、この均衡はかならずしも磐石ではない[6]。コルネリウスは、この均衡を崩す要因が、カント哲学そのものの中にあるとみなした。かれはカント哲学に倣うだけにとどまらず、そこにまだ独断的前提が残されていると理解した。この独断的前提の手がかりは、認識能力に関する叙述に見出される。カント哲学では、異なるふたつの認識能力が区別されていた。ひとつは「対象によって触発される仕方をつうじて、表象を受けとる能力（受容性）」（KdrV.B33）としての感性である。もうひとつは「（心のたんなる規定としての）その表象との関係において対象が思考される」（KdrV.B74）能力、「概念の自発性」（ibid.）の能力としての悟性である。コルネリウスは、カントにおける感性と悟性との区別を、とりわけ自我と対象との関係において理解した。つまり一方で感性は触発によって対象へと直接に関係する能力であり、別の言い方をすれば、対象との直接的関係があってはじめて作用する能力である。他方で悟性は対象の実在から独立した思考能力であり、対象との関係の有無にかかわらず作用する能力である。コルネリウスによれば、カントにおける両認識能力の区別は、「法則をもったわれわれの認識作用と、その法則から独立した対象との対立」（TrS.29）がすでに与えられていることにもとづくとされる。カントにおける感性と悟性の区別は、認識主体となる自我、そして認識能力から超越した対象を前提としているのである。ふたつの前提は、たがいに基礎づけあう関係にある。つまり経験の成立には意識へと作用する対象が必要であり、対象についての経験には統一的な意識としての「われ思う Ich denke」が必要となる。このように自我と対象がたがいに前提となり、基礎づけあっていることから、コルネリウスはカントの立論の仕方に「循環」（TrS.29）があると指摘したのである。

この循環を生じさせる要因には、独断的に定立された自我[7]と物自体がある。とくにコルネリウスが問題視したのが、物（自体）の概念の不明瞭さである。つまりカントが物と言うとき、意識へと作用する物の場合と、経験される物の場合があり、これらがどのような関係にあるのかが不明瞭なのである。カントは、無批判に定立される超越的物自体を、超越論的仮象として拒否していた。その上でかれは物を現象と物自体へと区別し、経験可能な対象として現象を位置づけた。それでは経験される物が現象だとすれば、「われわれの『心』において『物』が『作用して』感性的現象を『生じさせる』」（TrS.33）と言うとき、はたしてこの物はどのように位置づけられるのか。カントの言う現象なのか、あるいは物自体なのか。現象だとすれば、物自体とはどのように関係しあうのか。物自体だとすれば、どうして意識とかかわることができるのか。これらのことについて、カント自身の定義がはっきりとしていないままであった。カントが現象と物自体を区別しても、それぞれにたいする定義が曖昧なままなので、この区別によってかれが独断論を退けることができたと言い切れない。コルネリウスが指摘した独断的前提の中でも、とりわけカント哲学の「根本的欠陥」（K.8）とされるのが、この物自体概念である[8]。ではコルネリウスは、この「欠陥」にたいしてどのような解決を図ったのだろうか。

コルネリウスは「直接的所与の連関」（TrS.44）を経験する場面に立ち戻ることによって、独断的な定立を不要とし、カント哲学の均衡を保持できると考えた。このコルネリウスの姿勢は、カントと比べて経験を重視している。とはいえ、かれはカントの超越論哲学を単純に経験論に置

換したのではない。コルネリウスは、ここにゲシュタルト理論[9]を導入することで、問題の解決を図った。かれは「諸現象の合計ではなく、むしろつねに諸現象の法則が物という名前で呼ばれる」（K.16）と理解した。このかれの発想はカントの場合[10]とは異なる。つまり物は諸要素の集合体ではない。コルネリウスは一方でカントと同様に、意識における経験、われわれの認識する仕方を問い、物が「直接与えられる対象、あるいはわれわれの意識の体験」（TrS.53）、つまり経験・体験の直接的所与として現出するとみなした。ここまではカント哲学を継承し、それを経験主義的に、心理学的に解釈するにとどまる。だがコルネリウスは他方でこの直接的所与としての物を、意識の「連関の中で相互に成立している」（ibid.）とみなした。このとき物は、諸現象が法則的に連関した「複合体」（TrS.105）として与えられる。物は、われわれの意識に雑多に与えられてくるのではない。あるいはまた、そのつど物の諸現象がそれぞれ独立して経験されるのではない。物を構成する各部分は、つねに他の諸部分との連関において、あるいは物全体との連関において与えられる。われわれが物のある部分を経験するとき、他の諸部分との連関を含んだ全体の一部分として受けとる。それは別の言い方をすれば、物の他の諸部分を潜在的に含めて、物の全体を受けとっていることになる。こうして経験される物の現象はまた、別の時間における諸現象との連関において与えられる。たとえば現在経験された物の現象は、過去に経験された物の現象と関係性のあるものとして与えられる。物についての現在の経験は、非現在の経験と連関し、その連関の一部分として成立する。物は「統一的連関の部分あるいは分肢としてのみ知られる」（TrS.53）のである。

物がつねに複合体として経験されるとき、各分肢の連関は恣意的でもなければ偶然的でもない。物の諸現象が同一物をさしていると言えるのは、それぞれの現象の関係に何らかの必然的法則性が見出されるからである。たとえば現在と過去の経験について、両者が同じ物だと言えるのは、両経験の内容に「類似性」（TrS.39）が見出されるからだとされる。[11] この類似性とは、ある条件で現在現出してくる物の内容が、非現在においてもきまった内容で現出する事態をさす。コルネリウスによれば、「経験は比較され結びついた表象の全体」（K.61）とされ、比較をつうじて類似性が認識される。この経験において、ある条件で物の現象がつねにきまって与えられるとすれば、それは同じ物が現出していることであり、別の現象が与えられたとすれば、同じ物が現出しているとは言えない。コルネリウスにおいて物は、意識の外部に素朴に実在するのではなく、特定の条件で現出する法則そのものなのである。こうした法則としての物は、意識において現出してくる仕方として、意識につねに内在的なのである。[12]

コルネリウスは、カント哲学に残された独断的前提を解消するために、ゲシュタルト理論を援用しつつ、物を法則的に連関する複合体ないしは法則そのものととらえた。物は意識の経験連関において一元的に把握される。これによって、かれはカントにおける現象と物自体との区別を不要だとしたのである。

二　フランクフルト学派への影響

これまでの考察からわかるのは、コルネリウスが意識の経験、体験連関の中で問い、問いの対象を内在的に位置づけ、つねに意識に立ち戻ることに徹底していることである。かれの思想は、独断論的な思考を退け、あくまで意識においてその認識を問う一元論的で内在主義的な意識の哲学なのである。ところでこうしたかれの発想が、ホルクハイマーとアドルノに代表されるフランクフルト学派に影響を与えている。ふたりは、

ともに大学時代にコルネリウスのゼミに所属していたことから、当時の作品に影響が顕著にあらわれている。そこでそれらの作品を手がかりとして、この影響関係について考察したい。

1　ホルクハイマーへの影響

ホルクハイマーの教授資格論文「理論哲学と実践哲学の結合子としてのカント『判断力批判』」では、カント哲学における体系的統一の問題について論じている。カントは理論哲学を実践哲学[13]から区別し、両哲学の橋渡しとして判断力の批判を導入していた。また理論哲学の機械論的原理では説明できない自然[14]の偶然性、あるいは自然の偶然的集合を、判断力による主観的判定や理念による統一によって把握しようとした。これにたいしてホルクハイマーは、カントの要素還元主義的な思考を退けて、コルネリウスからゲシュタルト理論の方法を引き継いだ。かれは自然を「孤立した諸々の物からなるたんなる混沌以上のもの」（HGS2.107）であり、「全体 Ganze としての自然」（HGS2.108）だと述べている。かれによれば「乱雑な感性的諸要素だけがわれわれに直接的に与えられているというのは本当でない。むしろわれわれが感性的諸要素についてそもそも語ることのできるのは、それらがもともと相互的なもの Zueinander の中に含まれて与えられていて、この相互的にあるものから何らかの構成部分が作為的‐抽象的に引き離されたかぎりにおいてだけである。われわれの意識の連関において登場するどのような感性的な布置 Konstellation も、あの抽象的に獲得された『諸要素』の属性を集めたところでくまなく記述されることはできない」（HGS2.119）。自然の多様は、感性においてすでに連関の諸部分として、必然的法則を備えた全体の一部分として与えられるのであり、それを悟性が構成することになる。それらは理性が理念によって包摂しなくとも、すでに統一的に把握されている。したがってホルクハイマーによれば、「現実がア・プリオリにたんに集合体および集合体の総体として考えられるかのような見解は、維持できないということが示された。この箇所では、カントが橋をかけようとしたあの『見渡せない深淵』はまったくない。すなわち理念は現実において実在化されて見出され、現実は理念へと高められるのである。必要なのは、合一するための統制的原理という橋でない」（HGS2.108-109）。このようにホルクハイマーは、理論哲学の枠内で対象を統一的に把握でき、実践哲学との区別も、結合子としての『判断力批判』も不要だと考えたのである。

2　アドルノへの影響

アドルノの教授資格申請論文「超越論的霊魂論における無意識の概念[15]」は、「無意識の概念を超越論的方法へと立ち戻って指示すること」（AGS1.104）、つまり「無意識の超越論的理論」（ibid.）の構築を課題としている。無意識の概念は、カントにおける物自体概念と同様に、意識から超越して実体化されうるものとしても考えられかねない。そこでアドルノは、無意識概念を意識の経験との関係において理解しようとした。無意識概念はたんに無意識的として意識から区別されるものではない。むしろそれは何か意識において現出したときにはじめて、意識されていなかったはたらきに気づかされるようなものである。アドルノによれば、「いっさいの無意識的なものは、例外なく必然的に意識的なものへと関係づけられて」（AGS1.203）おり、いわば意識化されてはじめて語られうるのである。したがって、「端的に意識の連関に超越的だとされる諸事実は［……］つねに注意されていない諸事態、あるいは認識できていない諸事態と名づけられる」（AGS1.120）。無意識概念は、意識と何らかのかかわりをもつが現在体験されていないものであり、その意味で積極的に語ら

れるものではない。アドルノによれば、「無意識の概念そのものは〔……〕積極的に規定されるのではなく、ただ意識の否定をつうじてのみ規定され」（AGS1.118）、「つねに意識に内在的」で「つねに心的なものとして把握される」（AGS1.120）。このように、無意識概念は消極的・否定的に、意識的でないものとして理解される。それはあくまで意識の連関において把握されるものであり、ある意味で意識的なものなのである。

だが無意識の概念はこのように消極的に語られるだけではない。アドルノは無意識の概念について、独断的実体化を回避しつつも、より積極的に位置づけようと試みた。その際かれは、「超越論的方法と決定的に一致する」（AGS1.269）という精神分析を導入する。アドルノはコルネリウスとフロイトの思想を結びつけた。フロイトによれば、「心的諸過程は、それ自体で無意識的であり、意識的諸過程は心的生全体のたんに個々の作用であり、一部分であるにすぎない」（FGW.XI.14）とされる。前述の消極的理解においては、無意識概念は意識的でないものであったが、ここでは心的なものを総じて無意識的と位置づけ、その一部分が顕在化して意識的なものになると理解されている。こうした無意識概念が作用して意識と関係することは、ふたつの意図 Absicht の関係として理解される。すなわちひとつは心的過程における「妨げられる意図」（AGS1.250）としての意識であり、もうひとつは「妨げる意図」（ibid.）としての無意識、つまり抑圧である。たとえば何か言おうと意識したが、意識していない別のことを口にしてしまう、という錯誤行為がある。フロイトによれば、これは心的過程における「ふたつの意図の干渉をつうじて発生する」（FGW.XI.54）。こうしたことは「何かを語ろうとして現前している意図」（FGW.XI.60）が、抑圧されていた別の意図によって妨げられることで、「語り手が、その妨害する傾向を口に出さないと決心した後で、言いまちがいが起こる」のであり、「抑圧された傾向が、語り手の意志に反して口に出る」（ibid.）のである。したがって心的過程において、無意識的な意図は、意識的な意図を妨げる傾向をもって出現してくる。アドルノはフロイトのこうした見解を踏襲して、意図という観点から無意識概念を理解したのである。[16]

おわりに

コルネリウスは、独断論を退け、経験を重視しつつ、諸学問の根本となる哲学の構築をめざした。こうしたかれの構想は、フッサールをはじめとした同時代人による論駁を受けたが、かれの教え子であったホルクハイマーやアドルノに少なからぬ影響を及ぼした。ホルクハイマーとアドルノの論文は、いわゆる大学時代の習作にとどまるものでもなければ、後のふたりの思想から断絶したものでもない。とりわけ事実的・現実的なものや経験という場面へと目を向けるという、若きふたりの考える仕方が、コルネリウスの影響のもとで形成されたのである。その一方でふたりは、コルネリウスの指導のもとで論じた問題を基礎として、そこから脱却し、自らの思想を展開させた。ホルクハイマーは実践的関心にもとづいて社会や文化への批判的なまなざしを強めた。かれの関心から提起される諸課題は、コルネリウス的な理論哲学、純粋に認識論的な立場を超え出ることになった。またアドルノは、無意識概念の実体化への拒否とともに、社会関係における無意識的なものの実体化、イデオロギー化も退けようとした。かれはそれを「無意識の脱呪術化」（AGS1.320）と名づけ、コルネリウス流の認識論的射程を超えたところに、課題を見ようとした。実体化を拒否して、意識内在において意識的でないものを見ようとするアドルノの姿勢は、その後も一貫して保持された。意識における十全な認識から免れる事態、意識的でない諸事態への洞察は、後年

の非同一的なものの思想の端緒となっているのである。

文献および略号

Hans Cornelius;

Psychologie als Erfahrungswissenschaft. Leipzig 1897.（文中 PE. と略記）

Einleitung in die Philosophie. 2.Aufl., Leipzig, Berlin 1911.（文中 EidPh. と略記、原著第二版の頁数を表記する）

Transcendentale Systematik. Untersuchungen zur Begründung der Erkenntnistheorie. München 1916.（文中 TrS. と略記、原著の頁数を表記する、以下同）

Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft. Erlangen 1926.（文中 K. と略記）

Max Horkheimer;

Über Kants Kritik der Urteilskraft als Bindeglied zwischen theoretischen und praktischen Philosophie.（1925）in hrsg. v. Alfred Schmidt und Gunzelin Schmid Noerr; *Gesammelte Schriften. Band2*, Frankfurt am Main 1987, S.75-146.（文中 HGS2. と略記、全集版の頁数を表記する、以下同）

Theodor W. Adorno;

Der Begriff des Unbewußten in der transzendentalen Seelenlehre.（1927）in hrsg. v. Rolf Tiedemann; *Gesammelte Schriften. Band1,* Frankfurt am Main 1973, S.77-322.（文中 AGS1. と略記）

Immanuel Kant;

Kritik der reinen Vernunft. 1.Aufl.（1781）in hrsg. v. Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften; *Kants gesammelte Schriften.*（以下 *Ak.*）*Band IV,* Berlin 1903-1911, S.1-252.（文中 KdrV. と略記、原著第一版の頁数を表記し、頁数の前に A を付記する）

Kritik der reinen Vernunft. 2.Aufl.（1787）in *Ak. Band III,* Berlin 1904-1911.（文中 KdrV. と略記、原著第二版の頁数を表記し、頁数の前に B を付記する）

Kritik der praktischen Vernunft.（1788）in *Ak. Band V,* Berlin 1908-1913, S.1-164.

Kritik der Urteilskraft.（1790）in hrsg. v. Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften; *Kants gesammelte Schriften. Band V,* Berlin 1908-1913, S.165-485.（文中 U. と略記、原著の頁数を表記する）

Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können.（1783）in *Ak.Band IV,* Berlin 1903-1911, S.253-384.（文中 Ak. と略記、全集版の巻数と頁数を表記する、以下同）

Grundlegung zur Metaphysik der Sitten.（1785）in *Ak. Band IV,* Berlin 1903-1911, S.385-464.

Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft.（1790）in *Ak. Band XX,* Berlin 1942, S.193-252.

Edmund Husserl;

Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Zweiter Teil.（1901）hrsg. von U. Panzer; Gesammelte Werke. BandXIX/1, Haag. 1992（Hua.XIX/1 と略記、全集版の頁数を表記する、以下同）

Sigmund Freud;

Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse.（1916-1917）in hrsg. v. Anna Freud; *Gesammelte Werke. Band XI*, 9.Aufl., London 1998.（文中 FGW.XI. と略記）

注

① 物理学については、G・キルヒホフからの影響が強く、「キルヒホフの講義は、わたしの学問的発展にとって決定的」（Hans Cornelius; Leben und Lehre. in hrsg. v. Raymund Schmidt; *Die deutsche Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen. Band2,* Hamburg 1921, S.83）だったと、コルネリウス自身が述懐している。

② 超越論的仮象は、理性が自ら作り出した（主観的）理念を、客観的だとみなすことで生じるものである。カントは心理学的仮象、宇宙論的仮象、神学的仮象の三つをあげていた。

③　カントによれば、「純粋理性の体系（学問）、つまり体系的連関において
あり、純粋理性にもとづく（真および見かけの）全哲学的認識」（KdrV.
B869）、「批判を含んだ全純粋哲学」（ibid.）が形而上学である。ちなみに
三『批判』書は「ア・プリオリなあらゆる純粋認識に関する理性の能力を
研究する予備学（予備演習）」（ibid.）とされる。

④　コルネリウスは、独断のまどろみにたいする批判について、その端緒を
R・デカルトに見出していた。デカルトは「考えるという疑いえない事
実」（K.3）を、「意識経過という疑いえない事実」（ibid.）を発見してい
た。その後イギリス経験論において、意識経過の事実にたいする分析に
よって独断への批判がおこなわれた。とりわけヒュームによる自然主義的
諸概念への批判を、コルネリウスは高く評価し、これがカント哲学に継承
されたと指摘した。だがその一方で、「[……]ヒュームの研究は懐疑論的
成果で終わっている」（EidPh.204）。この成果は、自然主義的諸概念を主
観的に条件づけられた性質とする。これによって「永遠に転変するわれ
われの意識内容あるいは知覚の流れ以外に何も与えられない」（ibid.）こ
とになる。さらに因果性についても主観的内容とされることによって、「原
因と結果の必然的結合」（ibid.）について説明できなくなる。コルネリウ
スはヒュームにたいして、心理学的方法による意識経過の分析を打ち出し
た点で積極的に評価する一方で、結局は懐疑論の帰着する点については否
定的評価を下した。コルネリウスにとってヒューム哲学の問題点は、すべ
てを感覚的印象に還元し、しかもそれらの印象が対象の孤立した要素とみ
なしていることであった。これらの要素は連合の法則によって結びつけら
れるが、あくまで蓋然的なままにとどまった。これは哲学を学問論的に理
解するコルネリウスにとって不十分なものであった。

⑤　コルネリウスによれば、心理学は「あらゆる形而上学的前提を排除した
心的諸事実の純粋に経験的な理論の基礎づけ」（PE.III）として位置づけら
れ、「心理学の認識論的土台」（ibid.）を列挙し叙述することをめざした。

⑥　その要因のひとつとして、『純粋理性批判』の改版や叙述そのものの動
揺をあげることができよう。『純粋理性批判』の公刊当時、著書にたいす
る多くの誤解が生じた。そこでカントは改版に際して「難解さと曖昧さを
できるだけ取り除く」（KdrV.BXXXVII）ことを試みた。ただしそれによっ
て誤解を生む原因がすべて解消されたわけではない。カントの叙述や用語
法に動揺が残されたことによって、カントの同時代、あるいはそれ以降に
さまざまに指摘され、解釈されてきた経緯がある。

⑦　自我にたいするコルネリウスの理解については、『純粋理性批判』の改
版への評価から窺い知ることができる。かれが注目するのが、分析論での
叙述変更である。第一版では、感性から悟性への経験認識の過程に沿った
叙述がなされている。これにたいして第二版では、認識主体である悟性、
自我（「われ思う」）の能力に軸足をおき、自発的な認識作用としての悟性
の積極的な役割が強調されている。カント自身、この改版はあくまで叙述
の仕方の変更にすぎないとされる。しかしコルネリウスからすれば、
「[……]この改変は本質的に内容の欠点となっている」（K.70）として、
カント哲学における均衡を崩し、独断的前提の維持につうじる変更だとさ
れる。この点でコルネリウスは『純粋理性批判』の第二版よりも、第一版
を積極的に評価している。

⑧　カントは超越論的弁証論において、アンチノミーの解決のために物自体
概念を「積極的な意義をもってふたたび導入している」（K.9）。これがカ
ントの「実践哲学のまったく誤った基礎」（ibid.）をなしている。コルネ
リウスによれば、こうした物自体概念の導入が改版のきっかけとなってお
り、「第二版は本質的に第一版にたいする欠点を際立たせている」（ibid.）。

⑨　ゲシュタルト理論は、十九世紀末から二十世紀にかけて、心理学を中心
に展開された全体論的思考のひとつである。この理論は、全体が部分の合
計以上の性質をもつというテーゼで知られ、メロディや運動する物体の知
覚という事例で説明されることが多い。対象はまとまりをもった全体、ゲ
シュタルト Gestalt として与えられ、その中に含まれる個々のものはゲ
シュタルト質 Gestaltqualität と呼ばれ、それだけで孤立しているのでは
なく、つねに全体との連関において妥当性をもつ。たとえばメロディは全
体としてはじめて意味をもつのであって、個々の音を取り出して分析して
も、そのメロディについては何もわからない。コルネリウスはこうしたゲ
シュタルト理論の思考を自らの哲学に応用した。

⑩　カント哲学において物は感性的多様として与えられ、悟性によって統一
的に把握されていた。経験される物は現象としてそのつど理解される。こ

うした諸々の現象から区別されて、諸現象を同一のそれとして集約する物自体が、不可知なものとして想定されていた。こうしたカントの思考は、物を感性的諸要素の集合体とみなす、要素還元主義的な発想である。この発想にもとづいて、認識能力や認識対象が分析される。つまりカントの場合、あらゆるものは諸要素が集まって成立し、何かについて知ろうとすれば、それを細分化して構成要素を詳らかにすることで、すべて明らかになると考えられたのである。

⑪　両内容が類似している、ということは、そこにその個別的内容にたいする法則性が生じることである。以後その法則に適う内容が与えられれば同じ内容だとみなされ、異なる内容が与えられれば法則が修正される。それぞれの法則は、個別的であると同時に意識における法則として統一的でもある。したがって、この法則は永遠不変の同一性を意味するのではない（vgl., TrS.194）。

⑫　物は、法則として必然的性格を備えている。それゆえ物が意識に内在しているとはいえ、それを恣意的に考えることはできない。その意味において物は、われわれの意識を規制するもの、意識のはたらきに制約を加えるものとしても位置づけられる。

⑬　本稿ではホルクハイマーの論文での叙述にしたがって、理論哲学を『純粋理性批判』、実践哲学を『実践理性批判』の立場とする。そもそもカントにおいて理論哲学は「自然の形而上学」、実践哲学は「人倫の形而上学」として構想されており、予備学としての『純粋理性批判』と『実践理性批判』とは厳密に言えば区別されなければならない。もちろんホルクハイマーは、それらが区別されるものだとは理解している。だがかれは論文で『批判』書を中心に議論している。

⑭　カントは自然について、「われわれが自然と名づけている諸現象における秩序や規則性」（KdrV.A125）と述べた。この文章において、カントが自然を何と名づけているのかについて、ふたつの解釈が可能である。ひとつは自然を現象とする解釈であり、もうひとつは自然を秩序や合法則性とする解釈である。ホルクハイマーは前述の箇所を引用しながら、自然を「規則そのもの」（HGS2.87）と解釈した。この解釈は、コルネリウスが物を法則と理解する立場を思い起こさせる。

⑮　この論文は、事前にコルネリウスから勧告を受け、最終的に提出が見送られている。自らの思想に沿うあまり、独自性に乏しいとコルネリウスが評価したためだとされるが、決定的な理由は明らかにされていない。アドルノは後に、P・ティリヒの指導のもとで、あらたに教授資格論文を執筆し、提出することになった。それが『キルケゴール　美的なものの構築』（*Kierkegaard. Konstruktion des Ästhetischen.*（1933）in hrsg. v. Rolf Tiedemann; *Gesammelte Schriften. Band2*, Frankfurt am Main 1962）である。

⑯　こうしたアドルノの理解は、自我をめぐる問題にも妥当する。カントは自我を、考える自我と客観としての自我に区別した。考える自我は認識の主語として前提となり、客観としての自我は経験をつうじて成立する。このふたつの自我を混同して合理的心理学が生じたので、カントは両者を区別して解決しようとした。これにたいしてアドルノは自我を、あくまで経験をつうじて規定された自我、すなわち経験的自我とした。アドルノによれば、合理的心理学による論証は、「たしかにその形式によれば『証明』されているが、しかし事実上は前提とされており、けっして意識連関の諸要因を分析することにもとづいて構成されるのではない」（AGS1.160）とされる。認識のたんなる主語としての自我は、自我自身の形式的推理でその成立が証明され、経験から独立して自我自身が積極的に定立可能である。だがこれは自我の独断的前提であり、実体化である。アドルノはこのように自我が実体化されることを拒否して、「『われ思う』は、たんに思想の表象された主観の形式的統一＝xを意味するのではなく〔……〕経験的意識経過におけるわたしの諸体験の、事実上の統一も意味する」（AGS1.163）と述べている。このような「わたしの意識の統一は、実際のわたしの諸体験の統一にほかならず、わたしの体験の連関から独立してどのような妥当性ももたない」（AGS1.162）。したがって自我は「経験的に、すなわち可能的経験の領域において理解され、わたしの諸体験の連関として経験的人格的意識へと関係づけられている」（AGS1.176）のである。

（本学非常勤講師）